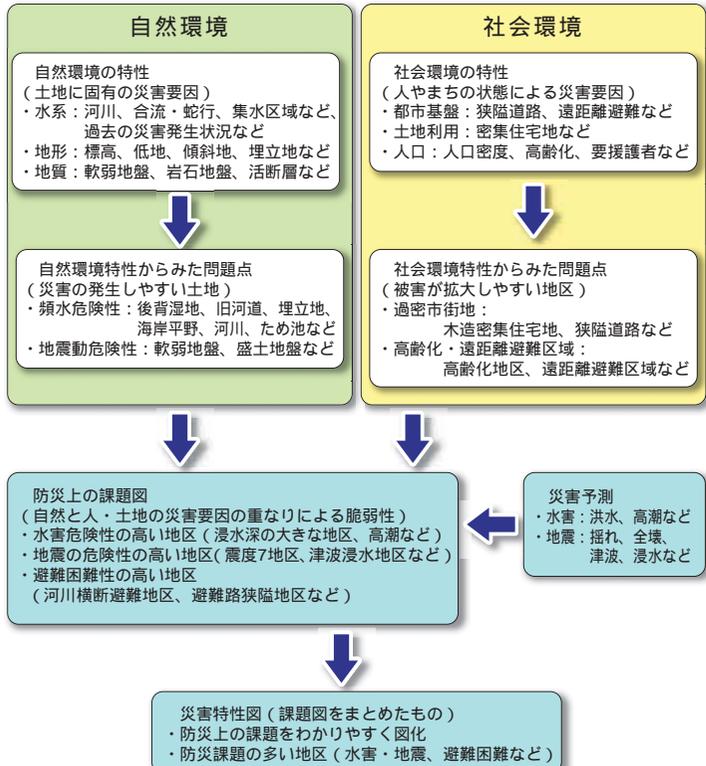




今の町並みよりも、土地の性質を理解することが大切である

地震には2種類があり、海溝型地震と直下型地震である。海溝型地震は一般にマグニチュードが大きく、津波を伴い、被害の範囲が広がる傾向にある。直下型地震はマグニチュードが海溝型に比べて小さいが、都市直下で起こるため被害が大きくなることもある

海溝型地震では、長周期地震動が被害を大きくしやすく、高層建築などでの被害が大きい傾向がある



**C 人・土地や街の環境を知る**

地域の環境を知ることが、防災の出発点である

環境には、土地、地盤高などの自然環境と、人口や土地利用、道路状況などの社会環境などがある(左図を参照)

**D 災害予測**  
(見直し中)

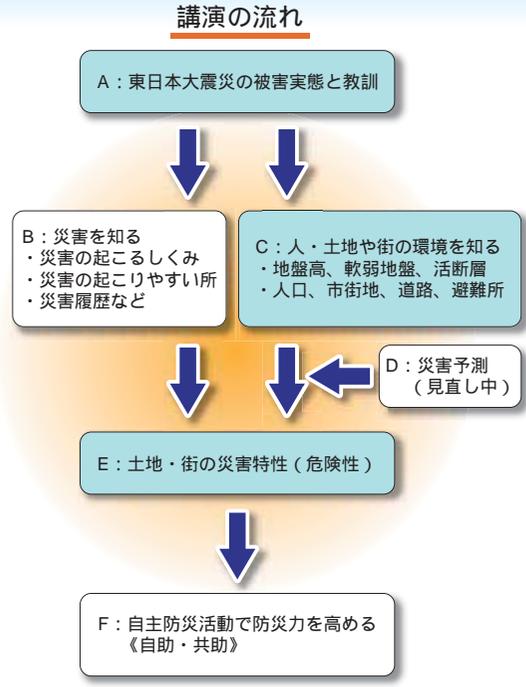
**E 土地・街の災害特性(危険性)**

災害の発生しやすい土地には、特に低平な地形での浸水や、脆弱な

**F 自主防災活動で防災力を高める**

地区の災害特性を理解し、地区の課題に合った解決策をとることが自主防災の基本である。他の地区での取り組みは参考にはなるが、そのまま自分の地区での取り組みに当てはまることは限らない

地区のコミュニケーション力を高めることが自助・共助の基本である



**A 東日本大震災の実態教訓**

東日本大震災の津波の被害は、それぞれの土地の地形、海岸線の形の深さなどが異なっていることから、被害や浸水区域が異なっていた

津波の浸水区域は、同じ平野でもより低平な氾濫原が中心で、氾濫原よりわずかに地盤の高い自然堤防や扇状地などでは、浸水しないか、浸水しても被害は軽微であった

宮城県松島町の海岸では、津波被害が軽微な箇所がみられた。これは、湾口部の島々が防波堤の役割を果たしたものと推定される

大津波警報は地震発生から3分で発令されたが、その高さは3mであり、現実の津波の高さとは大きくかけ離れていた。これは、速報値のマグニチュードが7.0と計測されたことから3mの警報となった

実際には、28分後に6.9、45分後に7.0と、大津波警報が更新されたが、被災地の住民には、停電のため伝わらなかった

群馬大学の片田教授の調査結果に

**B 災害を知る**

水害には2種類があり、外水氾濫と内水氾濫で、その起こり方は異なる

水害は地域に関わる河川の上流域の広がりを知り、その地域での気象状況などにも注意する必要がある

水害の被害を少なくするには、浸水前の避難が有効であり、浸水後の避難は危険を伴う

自宅の地盤高を知り、最寄りの河川や海面との高低差を知ることによって、浸水しやすさのある程度判断することが可能である

氾濫原の土地が都市化しても、浸水しやすしい性質は変わっていない!

問合せ 危機管理グループ 079(435)0991

# 地域の災害特性を知って 防災・減災を考えよう

播磨町自主防災組織合同研修会



【用語解説】外水氾濫：川の水が堤防から溢れる、あるいはそれによって川の堤防が破壊した場合などに起こる洪水のこと  
内水氾濫：市街地に降った雨が雨水処理能力を超える、あるいは川が溢れかかっている状態で捨てられないということで水が溢れること

【用語解説】氾濫原：洪水時に流水が河道などから溢流して氾濫する範囲の平野を指す。すなわち谷底平野・扇状地・沖積平野・三角州などのうちで洪水に浸水する範囲全部を指す。